

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：赤嶺太亮

所属：沖縄県立大平特別支援学校

記録日：2020年2月6日

キーワード：コミュニケーション、自己選択、自己決定

【対象児の情報】

○学年：小学部4年生

○障害と困難の内容：知的障がいに伴う自閉症

- ・5W1Hなどの理解に特に問題はない。
- ・教師や友達との関わりを好み、学習場面でも積極的に学級をリードすることができる。
- ・数字の強い興味があり、金銭のやりとりでも予算内の買い物ができる。時刻や時間を求めたりすることができるが、注意が散漫でやるべき活動が滞ったり予定を忘れてしまうことがある。

【活動進捗】

○当初のねらい

・iPad や Echo Spot をツールとして注意の散漫さを補い、日常生活で「自分のことは自分で」が実現できるようにする。

○実施期間：令和元年5月～

○実施者：赤嶺太亮

○実施者と対象児の関係：学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

・日常生活の様々な場面で、些細な刺激に対して注意が逸れてしまい活動が滞ることが日常的にある。例えば、「○分までに歯磨きを終わろうね→はい！と元気よく返事→2秒後には忘れて水遊び→○分までって言ったけど覚えているかな？→「本当だ！時間がないよ～」と焦る→教師がその場を離れると、また注意がそれて遊ぶ→時間がかかりその他のやりたかった遊びができなかった、といったことがその他の場面でもよく見られ、その都度教師の言葉かけがないと活動が滞ってしまう (fig.1)。

・「自分のことは自分でやらない」と思っているのに「物忘れ、話を聞いていなかった、洋服の裏表を間違える」などが日常的にある。



Fig.1 対象児の実態のイメージ図

○活動の具体的内容と事後の変化

・iPadのタイマー機能の活用 (5月中旬)

「数字に強い興味がある」という対象児の実態を踏まえ、まずは登校後の朝の支度でiPadのタイマーを使って時間内に支度が終わるように提案した。しかし、対象児は「別にいいです・・・(自由にやりたい)」とタイマーを使うことに納得していない様子であった (fig.2)。そこで、「登校後遊びに夢中で支度を

「終われない対象児の姿」を動画で撮影し、対象児に提示した。客観的に自分の姿を見ることで「僕なにもできていないじゃん!」と対象児はすぐに気づくことができた。それから積極的にタイマーをセットして支度を始めるようになった (fig.3)。

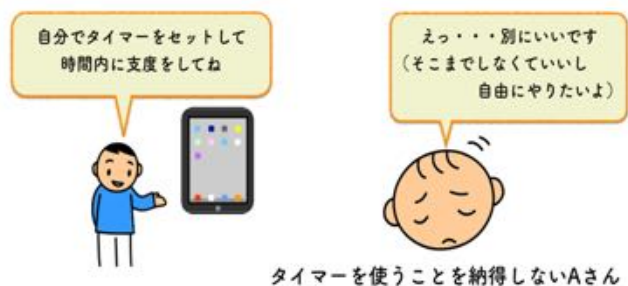


Fig.2 納得しない対象児



Fig.3 タイマーをセットして支度を始める様子

・アプリ「Google keep」の活用 (5月下旬)

時間を気にしなかったり注意が逸れたりして活動が滞っていた対象児は、教師が言葉をかけると iPad のタイマーを自分でセットして、「朝や帰りの支度」「休み時間を終える」「歯磨きや洗面等」の様々な場面でテキパキと行動できるようになってきた。しかし、「教師が言葉をかけると」という点で対象児の困り感の根本的な解決には至っていなかった。教師が言葉をかけないと「iPad を見忘れ、タイマーをセットしない」という課題があった。そこで、アプリ「Google keep」を使った。例えば、登校後の朝の準備など、覚えておきたい「要件」と「やることリスト」を記載し、設定した時刻に通知が届くようにした。そして、通知されたやることリストの内容に沿って行動ができるように決めた (fig.4)。取り組みを初めてすぐに、iPad を見忘れるという根本的な問題は無くなり、やることリストの内容に沿って一つひとつ進めることができるようになった。ここで、「時間を忘れて時間内に終われない」という課題が出てきたが、この点について対象児自身が「やることリストに“タイマーをセット”を入れたら時間を忘れない!」と言って自分でリストに追加した (fig.5)。

注意が逸れやすい対象児にとって、やることを可視化するという基本的な支援は有効であった。このアプリを使うことで、設定した時間に通知音を聞いて朝や帰りの支度、洗面等の日常生活の様々な場面で教師が言葉をかけることなく自分から活動することができるようになった。



Fig.4 Google keep の通知を受けて活動を始める様子

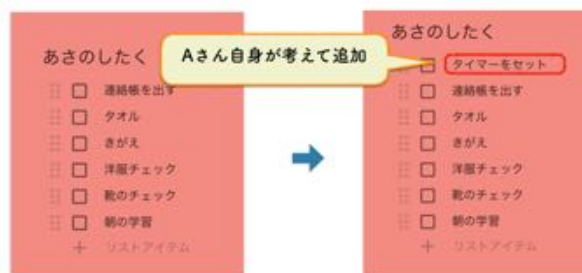


Fig.5 Google keep のやることリスト

・アプリ「Google カレンダー」の活用 (6月~7月)

6月に入ると、時間を忘れがちだった対象児が時間を意識するようになってきた。「今日は15分かかったから明日は14分でできそう」「みんな遅いよ早くしてよ」「何時になったら授業が始まるの?」という言葉が頻繁に聞かれるようになった。ある日、ホワイトボードの時間割に「こうすると忘れない!」と言って授業開始の時間を書き始めるようになった (fig.6)。そこで、アプリ「Google カレンダー」を活用して「朝の支度とかだけじゃなくて、自分の好きな遊びや授業の予定を入れて自分でスケジュール管理しない?」と対

対象児に提案した。これまで取り組んできた、「朝の支度や帰りの支度」「歯磨きや洗面」は場面以上に、「自分の好きなこと」を予定に入れるという点が対象児にとって良く、「やってみよう！」と意欲的に取り組みがスタートした (fig.7)。通知音が鳴ると「みんなそろそろ遊びは終わり!」「勉強の時間です!」と周囲にも言葉をかける姿が見られるようになった。また、意欲的な対象児は、様々な機能に興味を示した。中でも、予定の時間の「5分前」などに一度通知してくれる事前の通知機能に対しては「これ使える!」と言って設定するようになった。事前の通知機能を使うことで、その後に予定している好きな授業に向けて休み時間の遊びを終えたり片付けをしたりしてスムーズに活動に入ることができるようになった。



Fig. 6 忘れないように時間を自分で書く対象児



Fig. 7 Google カレンダーに予定を入れる様子

また、「自分の困り感に向き合い始めている」様子がうかがえた。Fig. 8は、6月下旬に対象児の自分の得意なこと、好きなこと、苦手なこと、できるようになりたいことを自己分析し、その結果をアプリ「Simple mind」で示したものである。対象児は、「できるようになりたいこと」に「時間を守る」と答えていた。日頃の様子から、ICT 活用に関して取り組みと当初は積極的ではなかったが、自分の苦手な気づき、それを補うものとして積極的に活用する様子が見られるようになった。



Fig. 8 対象児の自己分析の結果

・学校で Apple Watch の活用 (9月~10月)

9月以降は、iPad より携帯性の高い Apple watch へと実践を移行した。iPad のカレンダーと Apple Watch を同期させることで、毎朝 iPad で自分で設定した予定を Apple Watch の画面と振動で通知してくれるようにした (Fig. 9)。iPad のカレンダーに予定や時間を自分で入れ、Apple Watch のカレンダーと同期させた。Aさんも「かっこいい!」と嬉しそうにしていた。特に、「ブルっ」と震えるプッシュ機能は、注意が散漫な Aさんにとって有効であった。

Apple Watch を使うようになってから、授業の開始の5分前の通知を聞いて「そろそろ遊びは終わり!」とスムーズに準備をすることができるようになった。また、時間を忘れて活動が滞ってしまう場面 (朝の支度や

給食などの日課)では、自分で「15分あればできるかな!」などと言ってタイマーをセットして取り組む姿が見られるようになった (Fig.10)。



Fig.9 活動の様子



Fig.10 注意がそれて活動が滞る場面では自分でタイマーをセット

・日常生活で Apple Watch を使ってスケジュール管理 (11月~1月)

11月以降、Apple Watch を家庭に持ち帰り、スケジュール管理を日常生活に広げた。11月より、家庭に Apple Watch を持ち帰るようにした。早速翌日の連絡帳に「自分で目覚ましをかけて朝もスムーズに起きてくれました。すごい」と保護者からコメントがあった。「うーん、月火水は帰りが遅いからお風呂は19時半で、他の日は19時にする」等と家庭生活中で忘れがちな予定やその時間は全てAさんが自分で考えて入れたものである。家庭に持ち帰ることで、入浴、学校の準備などを学校と同様に忘れることが大きく減った。また、起床もタイマーを使って自分で起きられるようになった。



Fig.11 Aさんが考えたスケジュール (12月19日)

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

iPad や Apple Watch をツールとして注意の散漫さを補うことで、時間ややるべきことに意識が向かうようになり、「自分のことは自分で」ができるようになった。



○エビデンス

Fig.12 は、Fig.8 と同様に 12 月にも対象児の自分の得意なこと、好きなこと、苦手なこと、できるようになりたいことを自己分析し、その結果をアプリ「Simple mind」で示したものである。「得意なこと」に対して「Apple Watch、予定、時間を守る」と答えていた。一方で、対象児は「苦手なこと」に対して6月同様に「時間を守る」「忘れる」と答えていた。この点について A さんに「スケジュールを立てて頑張っているね。“時間を守る”は苦手なことではなくなったのでは？」と質問をすると「苦手だよ。だって Apple Watch がないと忘れる。でも、これがあるから安心」という答えが返って来た。自分の苦手や困りに向き合い、ICT を困りや苦手を補うツールとして活用しようとする様子が伺えた。

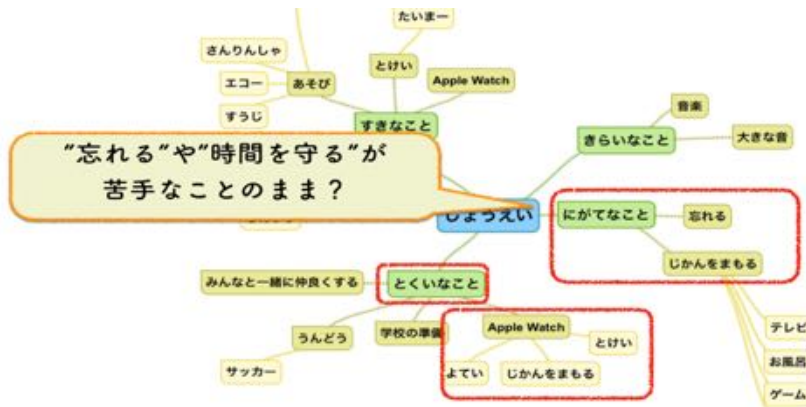


Fig.12 対象児の自己分析の結果



Fig.13 保護者からの聞き取りの結果

【今後の見通し】

現在の対象児は、Apple Watch を常に携帯して生活をしている。買い物の際に買いたい商品の合計金額を Apple Watch の計算アプリで計算したり、Siri で「〇〇に行きたいです」とルートを検索したりする姿が度々見られる。今年度は、将来対象児が自分の苦手を補うものとして、また生活を支えるものとして、ICT を活用していく素地を作ることができたと思う。今後も、ICT を「まずは使ってみる、触れてみる」を大切にしながら対象児の成長を支えていきたい。